

菅原眞理子著

新・家族の時代



中公新書

858



中公新書 858

菅原眞理子著
新・家族の時代

中央公論社刊

菅原眞理子 (すがわら・まりこ)

富山県に生まれる。1969(昭和44)年、東京大学文学部卒業。同年、総理府に入省。1980~81年、ハーバード大学留学。青少年対策本部、婦人問題担当室(第1回「婦人白書」執筆)、老人対策室を経て、現在、内閣総理大臣官房参事官。

著書『米国きりあうーまん事情』

『21世紀のシナリオ—どうなる団塊世代』

『サラダ・バーの女たち—リブのあとの最新アメリカ女性』

『女性が仕事を続ける時—アメリカからの報告』

『女性管理職の時代』ほか。

訳書 キャシー・キートン『ウーマン・オブ・ツモロウ』

新・家族の時代

中公新書 858

© 1987年

検印廃止

昭和62年11月15日印刷

昭和62年11月25日発行

著 者 菅原眞理子

発行者 嶋 中 鵬 二

本文印刷 三晃印刷

表紙印刷 トープロ

製 本 小泉製本

発行所 中央公論社

〒104 東京都中央区京橋 2-8-7
振替東京 2-34

定価 540円

ISBN4-12-100858-8

目次

プロローグ——家族の肖像

3

1 多様化する家族 3

二組に一組が離婚するアメリカ　さまざま
なシングル・ライフ　日本の新しい家族
「核家族」の終わり

2 家族環境の変化¹²

家族の分類と機能　「家」の廃止、サラリ
ーマン化　小家族化、核家族化　大家族
へのあこがれ　“一族郎党”の範囲

第一章 晩婚化と少子化

25

1 独身貴族からシングルへ²⁵

ニュー・シングル　男性の結婚難　「あ

えて結婚することはない」

2 空洞化はじめた結婚 35

新民法下の古い結婚 恋愛結婚が七割へ

シンデレラとピーターパン 妻の一人二役

時代

3 出産スタイルを選ぶ時代 48

先進国に広がる出生率低下 医学とバイオ

テクノロジー 少子化のインパクト

第二章 核分裂家族

1 離婚率の上昇 59

高齢者の離婚が急増 有責主義から破綻主

義へ 「相手の性格がいやになった」 家

庭は「子供を育てる場所」 「離婚天国」日

本

2 単親の女性たち 74

「もう結婚はこりごり」 子供は「顔も見た

くない” 婚姻と姓の問題 苦闘する母

子家庭と父子家庭 未婚の母は少数派

非嫡出子の差別は合理的か

3 シングル・ライフ 87

第三章 妻が働らく時

1 兼業主婦の時代 91

働らく主婦、五割を突破 M字型から台形

へ 専門職へ、男女平等へ 育児休業制

度と再雇用制度

2 ザ・パートタイマー 104

五〇%がパートを希望 九〇万円未満が半

数 「働らきに出てよかった」 ホビージ

ネス

3 育児と子供への影響 116

子供にはむしろ良い影響 子育ては開かれ

た家庭で 両立できない老人介護

第四章 家事サービスの変容

125

1 けなげな共働らき主婦

125

「遅くなつてごめんなさい」 新人類も変化なし

2 「内助の功」の価値

131

石垣綾子と第一次主婦論争 「交換価値は生まない」か 主婦は「夢の自由業」

3 夫の参加と外部化

142

第五章 家庭株式会社

147

1 ローン付きの重装備型住宅

147

所得上昇と家事の増加 持ち家の増大と住宅ローン 高所得者は財テク志向

2 サービス支出の急増

159

家計から個計へ 財からサービスへ 共働らき世帯の家計

3 ああ転勤、単身赴任 165

もう一つの単身赴任論

長過ぎる労働時間

第六章 高齢化社会の家族

1 親子関係多様化の時代 171

特別テンポの高齢化 直系家族型周期の終わり 『おじいさんの台所』 家族と同居したい、長男と同居したい

2 “子孫に美田を残さず” 184

高齢者は全体としてリッチ 年金、退職金とも水準低下傾向 エンジョイ派は持ち家・同居者 子供に頼らず頑張る 「武蔵野方式」「老後安心信託」 均分相続から対価的相続へ

3 誰が高齢者を介護するか 197

「寝たきり」「痴呆」は八〇代 夫は妻に頼り、妻は嫁に頼る 公的サービスは始まっ

たばかり シルバーサービスの広がり

エピソード——「プロテウス家族」の提唱

七割が長男か長女に 女性の一人暮らしは
確率一五％ 家事が男性の第二職業に
家族の理想像

あとがき
220

新・家族の時代

献身的な愛をもって支えてくれた母に

プロローグ——家族の肖像

利他的個人主義は……我といふ城廓を堅く守って、一歩も仮借しないであつて、人生のあらゆる事物を領略する。

森 鷗外『青年』

1 多様化する家族

二組に二組が離婚するアメリカ

日の光が木々の緑にはじけ、はるかに大西洋も望む入江の奥に、ルーシーとジェリーの新しいカントリーハウスがたっている。伝統的なニューイングランド型の家は、二人の意向が、壁の色から天窓の位置までこまかく反映している。

その真新しい広い家のランチディナーにやってきたのはJ氏一家と、F氏一家。J氏はあるリサーチ会社の副社長で、かつマーケティング・コンサルタントとして活躍中、妻のシーラは建築

家。大学生のジムと七年生（日本の中学一年）のポールの二人の子供もつれてきている。

ところがポールの肌は浅黒い。ジムはシーラと姉弟のようにみえる。それも道理、ジムはJ氏の前の結婚で生まれた子供で、シーラとは一二歳しか違わない。ポールは孤児で、J氏とシーラが養子として育てているという。

日本人的センスでいえば、血のつながらない親子だが、彼らは和気あいあいと実に仲がよい。

J一家のみならず、F氏も再婚で、現在の妻エリスと彼女の前の結婚で生まれた娘とF氏との間に生まれた息子と暮らしているし、ホスト役のルーシー達も再婚同士。ジェリーの二人の娘は前の妻と暮らしている。

そこに集まった七人の成人男女のうち、離婚経験のないのはシーラと私だけだった。

結婚二組に一組が離婚するといわれるアメリカで、離婚者が多いのは当然かもしれない。しかも離婚した男女は再び結婚し、あるいは親子の面接権を行使して週末に親子の絆をたしかめあったり、夏休みなど一定期間ともに住んだりしている。

したがって「父」といっても生物学的実父のことか、それとも現在いっしょに生活している母の配偶者か、話をしていても迷うこともある。兄弟姉妹となると更に複雑で、両親とも共通の兄弟姉妹、どちらかの親の一方だけが共通の半兄弟・半姉妹、それに血はつながらない親の前の結婚で生まれた継兄弟姉妹などに広がっていく。

オーストラリアのJ・コノリーは『ステップ・ファミリーズ』という本の中で、ステップ・ファミリー（継家族）形成には三七通りの型が可能だと指摘している。J氏やルーシーたちの場合もそのうちの一つのパターンというわけである。

たとえば、一回の離婚後、実の親が再婚すれば、家族の人間関係は拡大し、一人の子供は四人の親と八人の祖父母を持つことになる。これが再々婚やそれ以上になるとその人間関係は累乗で拡大していく。

このように拡大した家族は、閉鎖的な一小集団ではなく、血縁、非血縁関係からなる拡大した親族ネットワークというべき色彩を強くしている。

さまざまなシングル・ライフ

他方で未婚、離死別をとわず、独身の男女も増加している。

昨年アトランタで招待された郊外のタウンハウスのディナーは、シングルの男女が勢揃いした。南部様式の豪邸の建ちならぶ一角から離れた新興住宅地の真新しい家のダイニングにあつまったのは、国際防疫機構に勤務するスーザンと、高校でフランス語を教えているマリーとボーイフレンドのジェフ、スーザンやマリーより一〇歳以上若いシシリアなど独身の男女ばかり。マリーはスーザンを助けて、ワインをあけたり、皿を片づけたりというホステスの助手をつとめ、普通の

夫婦の家に呼ばれたのと同じように落ち着いた、くつろげるひとときがすぎていった。

スーザンだけではなく、アメリカではシングルの女性が自分で家やマンションを買い、家具を揃え、旅行をし、女同士の社交を始めている。アメリカは日本とは比較にならないほどカップルを単位としている社会なので、どこへ行くにも男女ペアでないと恰好がつかず、シングルの男女は不自由で肩身の狭い思いをして生きてきたが、近年、シングルの期間を単に過渡期として位置づけるのではなく、この時にしかできないこと、この時期を充実して生きようという男女が増加しはじめ、その人々のライフスタイルがしだいに受け入れられはじめている。こんどFRB（連邦準備制度理事会）議長に就任したグリーンズパン氏も独身である。

私がこしばらくの間にあった女性をみても、女性の未来論『ウーマン・オブ・ツモロウ』の著者キャシー・キートンも、冒頭に紹介したアトランタのスーザンも、オタワのマーガレットも独身である。離別、あるいは未婚、異性の友人の有無など状況はさまざまで、キャシーのように高価な美術品に飾られた豪邸で暮らしている女性もいれば、友人達と同じマンションを手に入れ、引退や老後に備えてつつましく生活しているマーガレットのような女性もいる。

これら独身の男女もまったく孤立して生活しているわけではなく、友人あるいは親、兄弟、その子供達との親族ネットワークに組み込まれており、電話でのコミュニケーション、訪問・滞在、相互扶助などが行われている。

日本の新しい家族

日本でも、平均寿命が伸びるなかで、祖父母、父母、子供夫婦、孫などの四世代が同居している世帯が増加している一方で、単身赴任や離婚、夫婦だけの家庭、独身者の家庭が増加している。

A氏は東京の住居事情のせいもあって、平日は都内のワンルーム・マンション、週末は近県の家に住む家族のもとへ帰るといふ生活をしている。大学生、高校生の子供が祖父母と住み、親夫婦は仕事先へ赴任という生活をしているB氏の場合もあるし、Cさんの場合は夫が西ドイツに単身赴任し、自分は職場の近くのマンションを借り、子供は学校の寮に生活していて、夏休みにCさんと子供が西ドイツを訪れたり、C氏が帰国した時に祖父母の家であったりしている。D氏はパリに下の男の子をつれて赴任したが、仕事をもっているD夫人は受験期の上の男の子とともに日本に留まった。

家族が全国的、あるいは全世界的に散らばっているこれらの例は、ますます今後増えていくだろう。これらの人々は家族問題について特別の主義主張をもっているわけでもなく、仕事や家族の状況の変化にあわせて自分達の住み方を選んでいくだけである。

また、中間管理職の男性が朝から晩まで組織の一員として自由時間を切り刻んで働いている一方で、退社後にジャズダンスや古典研究を楽しみ、気軽に海外旅行に出かける独身女性もいる

し、夫と死別後もきちんとした職業を世話され、亭主閥白だった夫の在世中より、もっと自由に伸び伸びと子供達と生活をエンジョイしている女性もいる。

もちろん男性でも、独身生活を「男やもめに花が咲く」とばかり楽しんでいる人もちらほらみかけるようになってきた。離婚や婚外恋愛も日常的になってきている。

明るく仲の良い大家族ばかりを扱ってきたテレビのホームドラマの分野でも、現在、家族の愛や結びつきを真正面からとりあげているのは、離婚した父親が子供を育てる「北の国から」であり、叔父、叔母にひきとられた子供の生活を描く「オレゴンから愛」である。

これらをみてみると、「幸福な家族」「幸福な人生」についてのスタンダードはない、ということとを痛感させられる。少なくとも外から見た形によって判断するのは間違いだということがよくわかる。トルストイの『アンナ・カレーニナ』冒頭の有名な言葉「幸福な家庭はみな一様に似通っている」とはいかなくなっているのが、現代の家族である。

「核家族」の終わり

これらの新しい「家族」は、風俗的な興味をひく一時的な現象ではない。夫と妻と子供達だけで独占的、排他的に結びついていた「核家族の時代」はすぎ、親族や友人などに開かれた新しい家族の時代がはじまっていることを示す「きざし」である。これらのゆるやかな結びつき、ある